広報伊達 141

発行日　令和４年３月17日
発行者　伊達地区小学校長会
　　会長　高野孝男
編　集　　同　広報部

《巻頭言》

授業の充実を目指して

伊達地区小学校長会副会長
木　村　圭　吾
（伊達市立粟野小学校長）

はじめに

学力向上は学校経営上大きな柱であり，その中核となるのは授業である。それに関連して，今後，重要になるであろうキーワードについて研修したことも交えながら述べたい。

1　個別最適な学びと協働的な学び

文部科学省から「令和の日本型教育」（答申）が出されている。その中で２つの学びについて述べられている。

「個別最適な学び」とは，「指導の個別化」，「学習の個性化」の２つの内容を含んでいる。「指導の個別化」とは「特性や学習進度等に応じ，指導方法･教材等の柔軟な提供･設定を行う」こと，「学習の個性化」は「子供の興味・関心等に応じ，一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供する」ことである。

また，「協働的な学び」とは「探究的な学習や体験活動等を通じ，子ども同士で，あるいは多様な他者と協働しながら」学ぶことである。

この２つの学びのバランスが大切であると考えるが，基礎・基本をしっかり身につけさせ，そのうえで，その子のよさが発揮できるような学習を目指すことが述べられていると思う。学習内容については，各学年ごとにスパイラルを描くように内容を深化させながら，何度も学習できるようになっている。各学年で履修すべき内容をしっかりと理解させ，次の学年につなげることが，とても重要である。

2　リーディングスキル（基礎的・汎用的読解力）

今年度福島県教育庁義務教育課から「リーディングスキル向上実践事例集」が出されている。リーディングスキルとは「事実や根拠に基づいて書かれた文章（教科書や新聞・説明書など）の意味や内容を正確に理解する力」である。国語科では主に説明的文章で培われる力であり，他教科にも共通する大切な力である。本校でも，今までの全国学力テスト等の学力分析をしたところ，子どもたちが問題文を正確に読み取れていないという実態から，２年前から国語科の説明的文章にテーマを絞り，リーディングスキル向上を現職研修に取り組んでいる。関連書籍として「ＡＩｖｓ（エーアイ　ブイエス）教科書が読めない子どもたち」（東洋経済新報社）等がある。リーディングスキルは今後，Society5.0の社会を生きる子どもたちにとって必須の力になると思う。意識して指導したい。しかし，決して新しい学力ではなく，国語科の学習指導要領に明記されている指導目標と同じ内容であると考えてよいと思う。

3　カリキュラムマネジメント

「①教科横断的な教育課程編成，②ＰＤＣＡサイクルによる教育の質の向上，③地域と連携した教育課程」３つの観点があるが，子どもたちが身につける資質・能力を明らかにして，教科横断的に教育課程を編成することが重要である。その力を総合的な学習の時間で育成し発揮できるように計画する必要がある。本校では，地域の教材化に力を入れている。

おわりに

今後とも研修を深め，授業を充実させ，子どもたちのさらなる学力向上を目指したい。

《 研 究 部 よ り 》

「ふるさと ふくしま」を見つめて

研究部長　平 久 井　　淳
（伊達市立梁川小学校長）

１　第 61 回東北連合小学校長会研究協議会福島大会を終えて

７月１日からの２日間，福島市で開催が予定されていた標記大会は，新型コロナウイルス感染症拡大防止のため紙面開催となりました。伊達支会からは分科会の発表だけでなく運営面の参加もあるところでしたが叶いませんでした。

しかし，大会要項や，ともに配付された「東日本大震災記録集『ふくしまの絆 統合版』」，「発表ＤＶＤ」からは，本支会はもとより，福島県内，東北各県の校長の，子どもたちへ寄せる思いを感じ取ることができました。

伊達支会研究の発表に向けて，これまで指揮を執っていただきました高野孝男会長様，発表資料やＤＶＤの作成に御尽力いただいた遠藤和宏半田醸芳小学校長先生はじめ，伊達支会すべての会員の皆様に御礼申し上げます。

２　福島県小学校長会研究集録第 44 集より

伊達支会からは昨年度の支会研究をもとに，発表分科会である，第３分科会 視点２「知性・創造性を育む教育課程の編成・実施・評価・改善」について報告を行いました。

発表分科会の研究に取り組んだ７校の実践事例からは，「教科等横断的な視点での各教科内容の組織的な配列」，「教育課程を編成・実施・評価・改善するＰＤＣＡサイクルの確立」，「地域等の外部の資源を含めた教育内容と教育活動に必要な人的･物的資源の効果的な活用」の３つの観点に沿った成果と課題が明らかにされています。また，課題解決のために行った「校長としての働きかけ」からは，「よい学校づくり」のためには，「校長のリーダーシップが必要」だということを，改めて感じることができます。

執筆いただいた渡邉かおり掛田小学校長先生，写真等の資料を提供いただいた各校長先生方，ありがとうございました。

３　令和４・５年度研究に向けて

本県の研究主題「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」のもと，これまでの研究の成果と課題を踏まえ，次年度からの２年間，「ふるさとを愛し ともに未来を切り拓く たくましい子どもを育てる学校経営と校長の在り方」を副主題に第Ⅱ期研究が始まります。

東日本大震災から 11 年が経過し，今度は新型コロナウイルスと向き合う日々が続く中，子どもたちには，社会の変化を適切に理解し，正しく情報を受け止め着実に実践していくたくましさが求められています。

「ふるさとふくしま」を見つめながら，子どもたちがたくましく未来を生き，世界に羽ばたいてほしいとの願いを込めて，令和４・５年度研究の手引きは作成されています。

校長として自校の課題を明らかにし，会員一人一人がリーダーシップを発揮しながら，伊達支会ならではの研究を深めることができるよう，よろしくお願いします

※　令和４・５年度伊達支会研究は，以下の２つの分科会の内容となります

＜発表分科会＞
第５分科会「健やかな体」視点２
・体験を通して実践的な態度を育む教育課程の編成・実施・評価・改善（環境教育）

＜希望分科会＞
第９分科会「自立と社会性」視点１
・子どもの自立と社会参加を図る特別支援教育の推進

《生徒指導部より》

生徒指導部調査から見える伊達地区の傾向と課題

生徒指導部長　伊　藤　　栄
（伊達市立上保原小学校長）

はじめに

生徒指導部で行った３つの調査からその傾向と校長としての取組について考えてみたい。

１　調査Ａ「子どもたちの心のケアに向けた校長としての取組」

ＳＣを活用した学校の割合，活用回数とも調査を開始してからこれまでで最も多くなっている。ＳＣの活用が図られていることが分かる。ＳＣへの相談内容は県の傾向と同じで「不登校」「発達障がい」が，児童，保護者，教職員に共通して多い。また，教職員を対象とした活用が年々増加している。

このことから，今後，ＳＣの活用場面がカウンセリングだけでなく，各種会議での指導助言や研修会での講師など，その専門性を有効に活用して，学校の課題解決に校長として取り組んでいくことが必要である。

２　調査Ｂ「「不登校」「いじめ」「虐待」「暴力行為」の未然防止と早期解消に向けた校長としての取組」

伊達地区全体の不登校の実態を調査結果から経年比較して見ると，増えた学年もあるが（＋１名）全体としては減少している（－２名）。不登校の要因は県の傾向と同じで，「不安などの情緒混乱」が最も多い（全体の 36％）。このことを踏まえて，不登校児童一人一人の原因や背景を分析し，ＳＣやＳＳＷ，関係機関との連携が重要と考える。また，不登校児童に継続して働きかけるとともに，新たな不登校児童を出さないために，欠席した場合のこまめな家庭との連携や早期対応が組織的に行われるよう校長としての対応が必要である。

いじめについての調査結果では，伊達地区における認知件数は，令和２年度は 194 件であり，令和元年度 235 件と比べ，41 件の減となっている。令和３年度の４～６月の３ヶ月間は 52 件で令和２年度の同時期（30 件）の約 1.7 倍となっている。ただ，令和２年度はこの時期に臨時休業があったため，令和元年度の同時期（69 件）と比較すると 75％に減少している。いじめの定義が周知され，いじめは決して許されないという意識が高まってきていると考える。ただ，新型コロナウイルス感染症の広がりの中で，感染者や医療従事者への偏見や差別が社会問題となっている。

これらのことがいじめにつながるケースも予想されることから，校長の判断の下，指導内容や使用教材を工夫しながら指導していくことが重要と考える。

３　調査Ｃ「ＳＮＳ・ネット利用の実態と校長としての取組」

今年度から全学校数の半数による隔年調査となり，前年度との比較ができないので，県の集計と比較し，地区として顕著に表れている結果から地区の課題を捉えてみた。一つ目は「フィルタリング機能の設置状況」が県（56.1％）に対し，地区（48.6％）と低いことである。二つ目はネットトラブルの有無の割合は県と同等であるが，その内容で「友達からの仲間はずれ」が県（15.8%）に対し，地区（22.8％），「親とのトラブル」が県（21.9％）に対し，地区（32.5％）と高いことである。

このことから今後も学校と家庭が連携して，児童にネットの危険性や安全な使い方について理解させていくとともに，教員，保護者もネットトラブルに対する危機意識を高めていく必要がある。

おわりに

３つの調査から地区の傾向を述べてきたが各校の実情に合わせて校長として対応していただければ幸いである。

お忙しい中，各種調査にご協力をいただきましたことに心より感謝申し上げます。

《特色ある教育活動》

堰本の教育は、地域と共に

伊達市立堰本小学校長　髙　見　良　典

愛宕の丘にある本校から西方に目をやると，正面に半田山，さらに奥羽の山々が連なり，眼下には信達平野が広がっている。その眺望は誠に雄大で，このようなすばらしい教育環境のもと，堰本小の教育は，地域の方々の思いと共に育まれてきた。令和の世になっても，その思いや伝統を大切に引き継いでいかなければならないという考えから，令和元年度末に，総合的な学習の時間で，地域の「人，もの，こと」に学ぶ「ふるさと学習」の単元を開発し，実践してきた。総合で育てたい資質・能力を培うと同時に，地域の中の自分の存在，生き方，将来の夢や希望などについて考える時間を設け，キャリア教育にもつなげている。

◇３年「地域の名人とふれ合おう」

地域の名人からカンフー，押し花，手品，太鼓などの技を教わりながら，名人のお人柄に触れる。

◇４年「民話に親しもう」

「梁川ざっと昔の会」の方に，地域に伝わる民話や「語り」を教わり，民話の面白さや民話に込められた昔の人の思いや願いに触れる。

◇５年「お米博士になろう」

ＪＡにお世話になって，バケツ稲栽培に取り組む。同時に，米や稲作に関する研究テーマを決めて，探究活動を行う。さらには，地域の高齢者の皆さんに，しめ縄作りを教わる。

◇６年「堰本の歴史を探検しよう」

堰本郷土史研究会の方にお世話になり，堰本地区にある歴史を伝えるものやそれにまつわる話などを調べ，地域の人々の思いに触れる。今年度は，愛宕神社の獅子舞の起こりを調べ，「舞い」を教わった。

堰本小は，これからも地域と共に歩んでいく。

地域を担う人材の育成を目指して

桑折町立伊達崎小学校長　大　木　　修

本校の創立は，学制が発布された明治５(1872)年の10月21日。極めて早い時期に学校が創設されたことになります。当時の伊達崎地区住民の気概を感じます。そして今も，保護者や地域の皆様から温かいご支援をいただいております。

地域の素材を生かした総合学習

本校の学区には「桑折ピーチライン」が通っており，献上桃「あかつき」をはじめとして様々な品種の桃の生産が行われ，併せてりんごも「王林」という品種がこの地区で開発されるなど生産が盛んです。このような地域の特徴は，そのまま学習の素材であるとも言えます。

本校ではこれまで「総合的な学習の時間」（以下「総合学習」）において，桃やりんご，さらに米の観察・収穫の体験学習等を通して，地域の産業と働くことについての理解を深めてきました。

実践例　４年生「探ろう町の仕事」

今年度は，４年生が「桃を材料にしてどのようなお菓子をつくっているのか」という問いをもったため，「至福の桃」シリーズの商品開発や農業振興活動拠点施設「レガーレこおり」，そして町の６次化商品の開発などについて産業振興課の職員の方に授業をしていただき，その学習をもとにして子どもたちがピザの新しい商品のアイディアを発案しました。その実現に向けてこれから「レガーレこおり」のシェフと話し合いをもつ予定です。

来年度に向けて

総合学習の目標と地域素材を基に各学年の重点を明確にして年間指導計画を見直し，学校テーマ「桑折をもとにみつめよう　町･自分･未来」に沿って，学習を発展させたいと考えています。

総合学習に子どもたちが生き生きと取り組む中で，地域を知り，地域を愛し，地域を担う人間としての資質を養いたいと思っております。

編集後記

幾度となく押し寄せ，そしてこれからも脅威となるであろう，新型コロナウイルス感染症。子どもたちの学びの環境と私たち教職員の働きがい，そして安全をいかに守っていけばよいのか・・・不安を抱え，迷いながらも進むべき方向を探る日々。このような中にもかかわらず，執筆いただきました校長先生方には，玉稿を賜りましたこと，心より御礼申し上げます。

伊達地区の校長先生方の結束が大きな支えとなり，明日への第一歩につながっています。「伊達は一つ」間違いなく，私たちの心の支えとなっています。これからも着実に歩みを進めていきたいと思います。